

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

国立公文書館	
分類	
配架番号	3 A
	14
	31-6

對戰車火器ニ関スル意見

昭和十四年十月二十三日

一 瀨 大 佐

国立公文書館	
分類	
配架番号	31-6

一 對戰車砲威力増大ノ必要
 戰車ヲ輕重大速度トスヘキカ速度ヲ犧牲トシテモ獲甲堅
 牢ナ大重量ノモノトスヘキカト云フコトニ就テハ由來各
 國ヲ論議セラレ其ノ主眼ニモ變遷ハアルケレトモ要スル
 ニ輕中重ノ各戰車ハ各其ノ特長ヲ有シテ斗テ夫々ノ任務
 達成ノ爲ニハ不可欠ノモノトアルカラ何レノ主眼カ優勢
 テアラウトモ其ノ何レモカ消滅シ去ルコトハナイテアラ
 ウ 孰レニセヨ戰車カ其ノ任務ヲ完全ニ達成センカタメ
 即チ障碍物ノ蹂躪遠距離ヲモ其ノ固有ノ強カナ火器ヲ以
 テ有スル敵火器特ニ對戰車砲及敵戰車ヲ制圧シ且ツ我カ
 歩兵ノ前進ヲ妨害スル敵火器ノ殲滅ヲ期スル爲速度裝甲

めくれず

ニ於テ改善セラル、ノミナラス武裝ニ於テモ發力化セラ
レヲ行クコトハ明カテアル
從ツテ戰車ヲ目標トスル對戰車砲トシテハ發射速度ノ増
大モ必要テアルカ鋼板貫徹威力及破壞威力ノ増強ヲ必要
トスルノテアル

二 對戰車火器増強ノ必要

對戰車防禦ノ爲ニハ其ノ戰況ヲ辨シ得ル總テノ火器ヲ以
テ當ラナケレハナラナイテアラウ 一般的ニ言ハハ遠距
離テノ戰車停止ノ爲ニハ輕砲之レニ任シ比較的距離テ
ノ戰車停止ハ對戰車火器ヲ以テスルノカ普通テアラウ
對戰車火器ノ裝備カ十分テナイナラハ何ウシテモ砲兵ヲ
對戰車防禦ニ使用スルコト、ナルノテアルカラ努メテ十
分ノ對戰車砲ヲ裝備シ砲兵トシテハ砲兵本來ノ任務ヲ遂
行サザル様ニスヘキテアル

對戰車防禦兵隊トシテ希望セラル、モノハ完全ナ戰車テ
ハナイカ前方ヲ十分敵火ニ對シ掩護セラレ側方及後方ハ
一統ニ砲片ニ對シテ掩護セラレ夕日天式ノ威力アル砲兵
ハ結局戰車ニ對シテハ戰車ヲ向ケルト云フコトニナル
實際ニ於テ敵ノ戰車ノ攻撃ヲ自己ノ戰車ヲ破壊スルコト
ハ必要テアリ特ニ防禦戰ニ於テ然リテアツテ佛軍及蘇軍
テハ右ノ様ナ見解ヲ取ツテアル様テアル 然シ之レラハ
事實ニ於テハ經濟上ノ困難モアツテ數ノ制限ヲ受ケル又
對戰車火器ノ使用ヲ有利トスル場合カ多々アルノテ對戰
車砲ノ必要價值ヲ減少スル理由トハナラナイノミナラス
隣邦軍ノ突撃ヨリシテ各種對戰車火器ノ至急増強ヲ緊要
トスル

三 對戰車火器ノ種類

現在艦船ニ各種任務ノモノカアラスニ戰車トシテモ將來

各種ノ戰車カ出来ルコト、恐ハレモカ現在ニ於テ戰車ヲ
大別スルトニ種類ニナレ、即チ輕装甲快速戰車ト重装甲
戰車テアル後ツラ之レニ對シテ大別シテ二種類ノ對戰車
格カ必要トナルテアラフ。
快速戰車ニ對シテハ彈丸ノ大發射力カハイラナイカ發射
速度カ大テ其ノ集中彈ノ中ニ戰車ヲ捕殺スルヲ對戰車
火器カ望マレレテアラフ。又装甲堅固ナ戰車ニ對シテハ
唯一發ノ命中テ戰車ヲ使用不可能ナラシムルヲ探ナ感カノ
アル砲彈カ必要テ之レニ對シテハ相當ノ口径ヲ持テ從ッ
テ單發ノモノトナルテアラフ。
步兵ノ直接支援ヲ要シナイテ戰車ヲ敵陣深ク侵入攻撃セ
シメル方法ハ各國ヲ考ヘラレ研究サレテナルカ其ノ結果
トシテ此ノ種ノ戰車ノ突入ヲ阻止スル爲ニ距離戰車防
禦兵器ノ發深ニ亘ル區分カ益々必要トナツテ来ル。從ッテ

此ノ發深中比較的後方ニ配備スル對戰車火器ハ程度問題
ハアルカ比較的大形ノモノテモ差支ナラズ、威力ヲ增大シ
得ルコト、ナル
第一次世界大戰テ産ミ出サレタ三十七毫米對戰車砲ハ輕戰
車ノ種ヲ薄弱ナ装甲板ニ對シテ十分ニ效果カアルケレト
モ今日ノ優秀發射機ナ鋼板ニ對シテハ唯距離戰車テノミ有效
テアル鋼板ハ有ニル新型戰車テハ益々發射機ニナツテ行クノ
テアルカラ現制ノ三十七毫米砲ヨリ一層大威力ノモノヲ整
備セナケレハナラヌ。即チ初速ト口径トヲ增大セシメル
必要カアル
至近距離テノ戰車防禦ノ爲ニハ小銃、機關銃モ使用スルコ
トハ勿論テアルケレト、之類ニ對シテ以テ満足シ得ラル、
モノヲハナイカラ其ニ對シテ歩兵自體ニ戰車防禦力ヲ
附與シテ精神的ニモ其效的ニモ戰車防止ノ自信ヲ持タセ

且對戰車砲ノ防禦火網其ノ他ヲ漏過シタリ又ハ監視外カ
ラ進入スレ戰車トオシハ對戰車砲カ破壞サレタ場合トカ
ニ如何ナル戰車ヲモ直接防禦セシムル爲機関銃ノ種ニ最
前線ニ進出シ得テ距離ニ對シハメナ目標ヲ捉メナイ然モ
一兵ヲ採用シシル對戰車火器ノ必要カアル 殊ニ敵砲兵
カ戰車攻撃ヲ支援スル場合戰車ノ攻撃目標ト其ノ後方ニ
配置サレタ對戰車砲トノ中間ヲ砲兵火ヲ以テ阻絶シ又ハ
對戰車砲ヲ制圧シタ場合前線ノ歩兵ノ固有火力ヲ殺大ナ
ラシムル爲ニ必要テアル又此ノ火器ハ攻者ハ常ニ防者
ノ反撃ヲ有效ニ防止スル準備カナケレハナラヌト云フ意
味カラ毎ニ攻撃戰ニ必要テアラウ 即チ之レヲノ爲ニハ
對戰車銃ヲ發フモノテアル今次ノモンハシノ戰闘テモ此
ノ種ノ火器相當數アツタラ何レ程有利テアツタラウカ將
承各國テハ此ノ種火器ヲ對戰車砲ノ補助的ニ歩兵ニ整備

スルコト、ナルト考ヘラレル
第二項ニ述ヘタ標ニ對戰車砲トシテ某程度ノ裝甲ヲ有ス
ル自走式火砲ヲ有スルコトハ望シイコトテ非常ニ重要ニ
使ハレルコトヲ思ハレル 又本砲ハ戰車攻撃ノ戰車ノ攻
撃推進ニモ有效適切ニ使用シ得ラル、ノテアル
目新シイコトテハナイカ砲塔ノミヲ曝露シテ停止射撃ヲ
ナス戰車ニ對シテハ石ノ自走式火砲カ有利ニ使用セラレ
ルテアラウ 又推進力非常ニ低伸スルケレトモ三十七毫
砲ヨリモ威力大ナル對戰車砲ヲ以テモ之レカ制圧ハ可能
テアラウ 尚、何ウシテモ彈道低伸シタモノテハ、敵回タト
云フコトテアレハ他ノ回前ニ使用セラレハ、直撃砲等ヲ
以テスレハ、良イ然シ此ノ直撃砲ハ十五種以上ノモノテナ
ク、レハ有效ナハナイテアラウ

四、對戰車火器ノ發定

以上述ハク處カラ希望スル對戰車火器ヲ舉ケテ見ルコトトスル

(1) 對戰車砲

對戰車砲カ具備スヘキ條件トシテハ

(イ) 一〇〇〇米以内テハ中戰車ノ如何ナル裝甲板正直角

方向ノ射撃ヲ貫通シ得ナケレハナラヌ

(ロ) 彈丸ハ適當ナ爆薬量ヲ有シテ戰車内ノ人員窓材ニ重

大ノ損傷ヲ與ヘ得ナケレハナラヌ

(ハ) 射撃ハ迅速テナケレハナラヌ 然シ高射機関砲ノ種

ナ發射速度ハ必須トハセラレナイ又方向射界モ大テ

目標ニ追隨シ得ナケレハナラヌ

(ニ) 火砲ハ小型テ敵ニ對スル目標カ小サク取扱運搬力添

増テナケレハナラヌ

現在各國ノ中戰車ノ裝甲板ノ厚サヲ見ルト最大厚テ

二五センチ最モ多ク使ハレテ牛ルカ三〇センチ厚ノモノモア
ルノテアルカ將來テハ最大裝甲板ハ三五センチ到達シウ
ル可能性カアルト認メラレル 従ッテ將來ノ戰車裝甲
板ノ發達ヲ豫想シテ現今テノ最優秀鋼板三五センチ厚サノ
モノヲ一〇〇〇米テ射貫スルコトヲ主條件トスル對戰
車砲ヲ造ルハ次ノ様ナモノトナル

口径 約四七センチ

重量 一七〇〇斤

種類 徹甲彈

初速 約八〇〇米

發射機構 半自動式

發射速度 約二五發分

方向射界 六〇度(開脚式)

高低射界 負五度 正二〇度

放射砲車重量
運動性

約六〇〇
牽引式トシテ小型牽引車ヲ主体トシ馬
匹ヲ三使用シウルヌ必要ニ際シテハ
カ移動容易ナルコト(小型射撃車ヲ附スレトアリ)

現制三十七口径砲ハ形体小運動容易ナルヲアルノテ四十七口径
砲ヨリモ第一線ニ近ク進出シ有数ニ使用セラレ得ルヲ
アラウ

對戰車砲ノ裝備セラル、教トモ關係カアルケレトモ凡
ユル方向ヲ射撃シ得友軍部隊ヲ超越シテ射撃スル爲ニ
全射撃機ト高イ射撃姿勢トヲ要求サレル場合カアルテ
アラシ契カ爲ニハ三脚架式ノ隠蔽式カ適當テアラウ
然シ斯ノ如キ要求ニ對シテハ何シテモ重量ノ増加ト云
フ不利カ伴フノテ勢ヒ此ノ種對戰車砲ハ口径ヲ小サク
セナケレハナラヌ

此ノ種對戰車砲ハ將來必要度カ増加セラレト考ヘラ
レルカ四七口径ノ威力アル火砲ニ右ノ種ナ條件ヲ持ク
セ七爲ニハ機構ノ考案ハ勿論テアルカ何ウシテモ超大
抗力ノ特殊材料又ハ分ヨリモ更ニ大抗力ノ合金ヲ
必要トスルノテ是非之等ニ就キ研究ヲ要スルト考ヘル
斯ノ如キ特殊對戰車砲ノミナラス一般對戰車砲トシテモ
是非比ノ重量軽減ノ手段カ必要ナル今三脚架式全
射撃機ヲ有スル三七口径對戰車砲ヲ選定スレハ現在ノ材
料ヲ以テ次ノ様ナ諸元トナルテアラウ

- 口径 三七口径
- 重量 〇、七〇〇kg
- 初速 約八〇〇m/s
- 高低射界 四五度 三二〇度
- 方向射界 三六〇度

次列他車重量
運動性

約五〇〇斤

馬匹又ハ發射牽引式

臂力移動可能

厚鋼板ノ貫徹力ハナイカ發射速度力大キクテ輕裝甲
快速戰車ヲ乘騎スルノニハ二〇兆級程度ノ機關砲力
欲シイ
不砲ニ希望スル諸元ハ次ノ様チアレ

口徑 約二〇兆

重量 約一五〇斤

種類 破甲榴彈

初速 約八三〇米

發射機構 自動式

發射速度 約一〇〇發分

方向射界 三六〇度

高低射界 負五度 正五〇度

重量(抜列) 約二四〇斤

運動性 三脚式發輪トシ一馬又ハ發射牽引トシ
臂力搬送ヲ容易ナラシム

本砲ハ高射砲テハナイカ超低空飛行機ニ對スル射擊可
能ナル採ニ構造シ第一線ノ對低空防禦ニモ兼用スル
對戰車自動砲トシテハ一名ノ兵ヲ操作サレ且四、五〇〇
米ノ距離ヲ輕戰車ニ對シ十分ナ效力ヲ有スル必要アリ
ル裝置ノ對戰車銃ハ一心能テアレカ之レテハ威力カ不
及スルノヲソクテ社數一ハ型ニ〇兆對戰車銃ノ
如クモカ取遣ト考ヘラレル其ノ諸元ハ次ノ様チアレ

口徑 二〇兆

重量 約一五〇斤

種類 破甲榴彈

初速 約七五〇米
重量 約五〇斤

發射機 單發

對戰車攻撃ノ任務ヲ有スル旨夫式火砲トシテハ次ノ諸

点ノモノヲ希望スル

火砲トシテハ九五式野砲程度トシ全周射界ヲ有セシム

砲架タル車台ハ九七式中戦車ニ準ス

即チ次ノ如キモノヲアル

口径 七五毫米

種類 六五〇〇発

撃種 破甲榴霰

初速 約五二〇米

方向射界 三六〇度

高低射界 負五度 正四三度

最大射程 約一〇、〇〇〇米
全備重量 約一二噸
運動性 九七式中戦車ニ準シ

五 結 言

以上ニ述ヘテ對戰車火器ノ中ノ主体ヲアルル七糎級對戰
車砲三七糎對戰車砲ニ〇糎級機関砲及對戰車自動砲ノ四
番ノ使用區分トシテハ自ラ明カテテテテニ四七糎級八對
戰車砲ノ縱深配備中比較的後方ニ三七糎及二〇糎級ハ比
較的前方ニ配置シ對戰車銃ハ第一線ノ歩兵火線中ニ使用
スルコトトナル
國軍トシテハ現制三七糎級ノ外ニ四七糎級對戰車砲及
對戰車自動砲ハ其非整備、レ必受カアルト考ヘル但シ之
レカ彈藥補充ニ就テ、遺憾ヲ要スルコト勿論テアル
又ニ〇糎級機関砲モ希求スル處ヲ示シテトモ總括上並

製造能力ノ問題カアルノテ出立得レハ保有シ度イケレト
モ二次的ノモノト考ヘテヨコシイ
自夫式火砲ハ経済上ノ關係モアルノテ今遠カニ多数整備
ト云フコトハ出来ナイテアラツケレトモ少数ヲモヨイカ
ラ是非製作シテ置ク必要カアルト考ヘル
對戰車砲ニ對シテ全周射取及隱頭式機構ヲ興ヘルコトハ
材料ノ改善ト共ニ研究スヘキコトヲ考ヘル 然ラ普通型
ノ對戰車火器乃多数整備セラレルト云フコトニナレハ斯
クノ如ク機構ノ對戰車砲ハ必ラスシモ必要テハナイトモ
考ヘラレル



